HOUSING TODAY
全建連
4月号
〒160-0004 東京都新宿区四谷3－9 建設国保会館ＴＥＬ.03(3341)9521
編集人／社団法人 全国中小建築工事業団体連合会
発行人／中川　勝　　発行所　有限会社全建連住宅サービス
一部 250円（直接予約購読料 1年分 3,000円 〒代含）

…百聞は一見に如かず！

現場分別の重要性を再確認

［産廃］現場見学会を実施

H12. 3. 24：埼玉県にて

◆今国会において新たに8件に及ぶ環境関連法案が提出され、いずれも成立の見通しとなっている。これらには昨年施行されたばかりの改正廃掃法の強化見直しや、建設省の推進する「建築解体廃棄物リサイクルプログラム」に基づく新法など、我々に直接影響する法律が多く含まれている。

◆全建連では対策特別委員会（委員長：鈴木由城）を設置し、産業廃棄物の適正処理に向けた運動を強力に推進しているが、この中心に位置するものとして①適正処理ルートの確保、②適正契約及びマニフェスト運用の遵守、③現場分別の徹底…等がある。とりわけ新法に絡む新たな課題として「リサイクル問題」が急浮上しており、③に掲げた「現場分別の徹底」が注目されている。

◆当会会員団体である埼玉県住宅産業協会（会長：金子真男）では、この産廃適正処理問題について早期の段階から対処しており、当会におけるモデル事業的役割を担ってきたが、こうした成果や現状の課題を業界の関係者により深く理解してもらおうとの狙いから、特別委員会を通じ現場見学会の開催を全国に呼びかけた。

岩手、石川、東京、神奈川から14名が参加

◆折しも春の嵐が通過し、天候の具合が心配されたが、出発地の川越プリンスホテルに全員が集合した午前8時30分には、日差しものぞく小春日和となった。

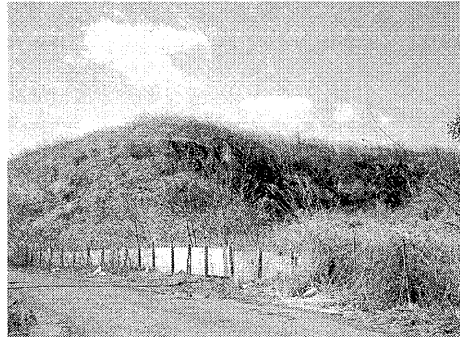
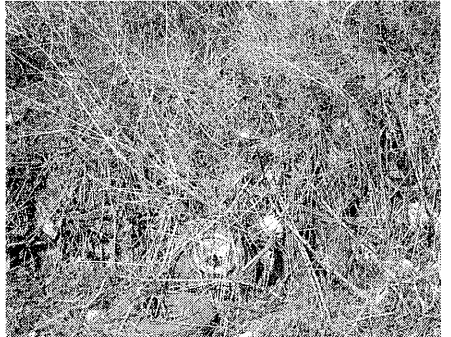
＝不法投棄現場＝

◆最初の目的地は花園町にある「不法投棄現場」である。10年近く前に投棄されていた現場で、今では草木が生い茂り一見すると古墳のようにも見える（写真1）が、歴としたゴミの山（写真2）であり、その殆どが建設系廃棄物であることがわかる。驚くべきことは、ここが山間の谷地や奥地などではなく、畑の広がる平地に悠然と存在していることである。

◆こうした不法投棄の山がどうして出来上がったのか、簡単にそのプロセスを紹介しよう。

〈写真１〉

〈写真２〉

〈写真３〉

1．不法業者が、地主に土地改良の話を持ち込む。（やせた赤土を掘り出し、黒土と入れ替え利用価値のある更地にする…等と持ち込む。）

2．その際に、少し深く掘って当社が抱えている残土を埋めさせてくれ…等と言葉巧みに説得し、相応の代金を前払いで地主に支払ってしまう。※勿論、正式な契約書の取り交しなどはなく、全て口頭で行われている。

3．やがて掘り起こしがはじまり、5メートルほど掘ったところで、残土ならぬ廃棄物の投棄が開始されるのだが、これで穴が埋まってもそれに留まらず、やがて大きなゴミの山が出現することになる。この段階で、地主が業者にクレームを申し入れても、業者の関係する暴力団が介入してきて結局は後の祭りとなる。

◆この現場は、不法投棄した業者も判明しているのだが、改正廃掃法施行前の行為であり、業者も片付ける意志を「表向き」は示しているため、摘発の対象となっていない。地主も現金を受け取っているなど弱みもあり、現状に泣き寝入りするしかないという現状のようだ。廃掃法改正に伴い、不法投棄現場の現状回復基金制度なども創設されてはいるが、これらの適用も不法投棄した者が特定できない場合に限られるため、今回の現場では対応できないままでいる。如何ともし難い現実である。

＝最終処分場＝

◆次に訪れたのは、わが国唯一の県直営最終処分場である「埼玉県環境整備センター」（写真3）である。寄居町にある山間部一帯に広大な敷地（97．7ヘクタール）を持つ施設で、一般廃棄物及び産業廃棄の無機物系廃棄物を受け入れている。

◆非常に厳格な周辺環境への配慮がなされており、敷地内も清潔感に満ちていた。ここに持ち込まれる廃棄物は、各中間処理場で処理された最終段階の廃棄物で、焼却灰や金属くず、ガラス・陶磁器くず、廃プラ、コンクリート殻など、有機物を一切含まないものに限られており、尚かつ、汚染物質の含有率が基準値以下で悪臭や飛散のないものとなっている。したがって極めて

（2面へ）

（1面からつづく）

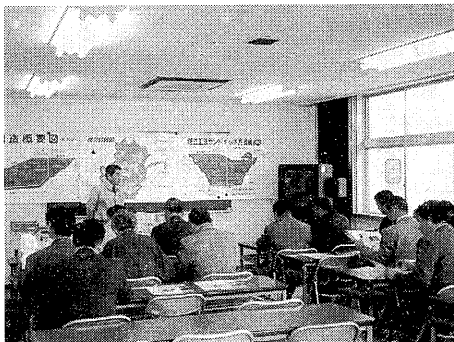
厳格に管理・処理されたもの以外は受け入れてもらえず、しかも埼玉県内のみを対象としており、搬入できる業者も厳しい審査と緻密な搬入計画が求められる。※言い換えれば、本来最も処理に困難となる有機系廃棄物や、これらの混じった混合廃棄物（以下、混廃）は搬入できない。

◆はじめに研究室で概要の説明を受け（写真4）、施設が手配したマイクロバスで廃棄現場（写真5）や管理施設（写真6）を見学した。写真5は、建設系産業廃棄物の一つであるグラスウールを廃棄している場面であるが、グラスウール以外一切の混入物もなく、グラスウール自体も搬入基準に合わせて小さく裁断されているのがよくわかる。ゴミとして捨てるために完璧な選別と加工が求められているのだ。

◆写真6は、施設の出入口にある検査ゲートで、目視による積み荷の確認と重量の計測等が行われる。搬入時に車両重量が計測され、廃棄後に再び計測して、その差を読むことで正確に廃棄重量が計算される。写真は出口側のゲートであるが、トラックのタイヤに注目していただきたい。先日の雨で廃棄場はぬかるんでおり、見学した私たちの靴は泥だらけとなったが、トラックのタイヤには微塵の泥も付いていない。これは、ゲートの直前にある車体洗浄設備を通過してくるためで、如何なるゴミや汚れも施設外に決して出さないための徹底した配慮である。

◆このゲートには他に、積み荷を目視検査する施設があるが、そこには各市町村から搬入される廃棄物のサンプルが並んでおり、契約外のゴミが搬入されないよう厳しくチェックしている。興味深いのは、同じものを処理した焼却灰でも出された市町村によって状態が異なっている点で、大小様々な粒状のものや、きめ細かな砂状のものなど、焼却施設の性能差が顕著に現れていた。

＝中間処理場＝

◆昼食を終え、次に向かったのは、本企画のメインともいえる中間処理施設である。今回は埼玉県住宅産業協会とも密接に連携し、中小工務店業界における産廃適正処理問題についても大きく貢献をいただいている「大空リサイクルセンター」（所沢市：写真7）を訪れた。

〈写真4〉

〈写真5〉

〈写真6〉

〈写真7〉

〈写真8〉

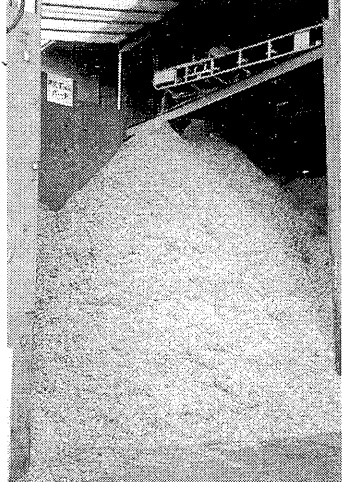
〈写真9〉

〈写真10〉

〈写真11〉

◆先の清潔感あふれる最終処分場とは異なり、ここは正にゴミ処理の最前線（写真8）である。廃棄物を満載した大型ダンプが絶え間なく入ってきては、所定の位置に積み荷（廃棄物）を降ろしていく…、広大な敷地（32,000㎡）も幾重に積み上げられた廃棄物の山で占められ、我々の乗ったバス1台が入るにも戸惑いを感じるほどである。

◆施設内の会議室で概要の説明を受け（写真9）、お借りしたヘルメットと長靴で武装して戦場へと向かった。この施設が受け入れている廃棄物の大半はゼネコンや大手ハウスメーカーから出される建設系廃棄物である。コンクリート殻、木材、金属、ガラス類、ダンボール、紙類を処理するための各プラントを中心に焼却施設、混廃選別処理ライン…等々が林立し、これを取り巻く廃棄物の山にはパワーショベル、ブルドーザーが何台も群がり唸りをあげていた。（写真10）

◆予め搬入時に分別されている廃棄物は、それぞれ区分けされた山のところに荷下ろしされる。※基本的にこの作業は運転手が行う。ただし、この「分別」というのは極めて厳しい基準をもっており、一片の混入物も許されない。例えば「ダンボール」の処理区画ではダンボールのみを扱っており、同じ紙類でもその間に取扱説明書のようなものが挟まっていたり、ビニールや発泡スチロールの断片などが付着したままでは受け付けてもらえない。住設機器の梱包材などにはこうしたものが必ず入っているが、紙類として一まとめにしてしまってはいけないのだ。もしこうしたものが混入していた場合は、混廃処理区画（写真11）に降ろすことになる。つまり、せっかくの分別排出もそれが不完全であるが故に無意味となってしまうのである。厳しいようであるが「リサイクル」を遂行するためには不可欠な処置なのだ。

〈写真12〉

◆きちんと分別された木材などは、その場で破砕装置にかけられ、大きいものはパーチクルボードの原料用チップ、細かいものは家畜舎等の床撒き材

（3面へ）

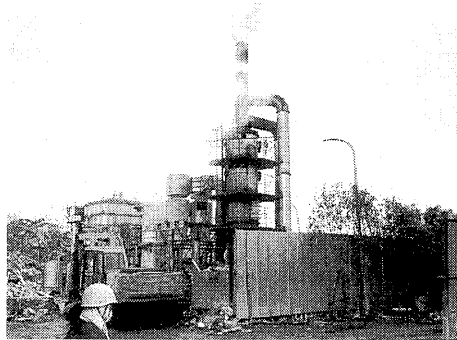
（２面からつづく）

やパルプ原料などとなって、新たな市場に出荷されていく。（写真12）

◆分別が基準どおりに出来ていれば、搬入に際して費用は殆どかからない。種類によっては無料で引き取るものさえある。リサイクル素材としての需要価値が見込めるからだ。逆に混廃であった場合にはその仕分け作業にかかる膨大な人件費・設備費等が計上されるため、相応の処理費用が求められることになる。

◆建設現場等における「現場分別」については、時間的・作業的負担が大きく、さらにコスト面での負担も大きくなるのではないか…といった不安をよく耳にするが、基準に合致した分別を徹底すれば、コストは確実に下げられるということを実感した。※リサイクル法が施行されればなおさらで、ゴミには高額の処理費用が求められるが、資源ならば需要価値が認められる…という至極当たり前の図式が明確に存在するのだ。

◆今回訪れた「大空リサイクルセンター」はその名が示すとおり、リサイクルについての研究開発にも力を入れており、そのための研究施設も完備している。ここでは、製品化した源材料の品質検査と新たな商品開発が行われており、ゴミの再資源化に向けた努力が日々積み重ねられている。

◆普段、我々はガラスや金属、コンクリート殻等に比べ、木くずや紙・布くずなどは、手間のかからないゴミであるように感じているが、現実は全くその逆で、これらが最も始末に悪いゴミであることを教えられた。汚れや濡れ

〈写真13〉

等がなく、きちんと分別されていれば、再資源化できるが、そうではない場合は焼却処理するしかないからだ。（写真13）この施設の焼却炉は極めて優秀で、高温焼却設備、集塵設備、中和設備、冷却設備等を完備しており、ダイオキシンレベルは現在厚生省が定める基準値の３分の１以下、更に酸性雨対策等も万全のものである。しかし、今後基準の段階的引き締めが実施されるため、まもなく撤去する計画であるという。

◆木くずや紙・布くず等は、有機系廃棄物に分類されている。つまり放置すれば腐敗し、悪臭や汚染物質を発生させる元凶となるのである。純粋な木材ならば腐敗しても土に帰るが、建材などには多くの薬品（防腐剤、防蟻剤、接着剤等）が含まれているため、処分が非常に厄介なのだ。こうした先進的な処理施設でも焼却処理が困難となってきている以上、残された方法は徹底した分別による再資源化しかない。「分別すれば資源、混ぜればゴミ」ということを改めて認識させられた。

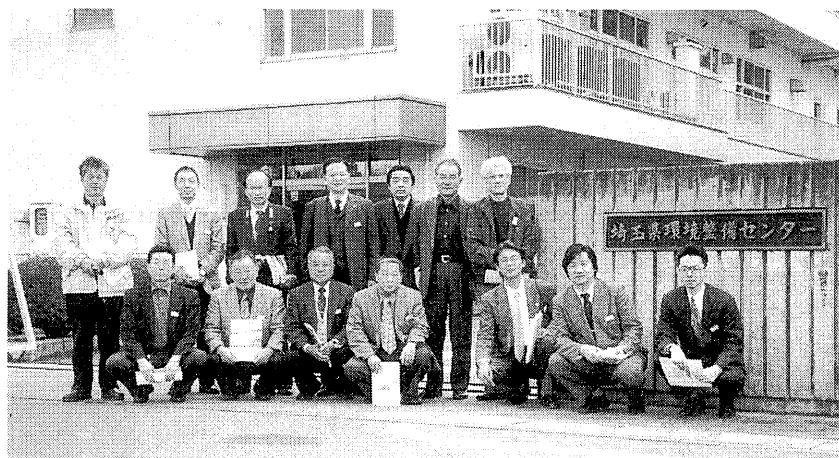
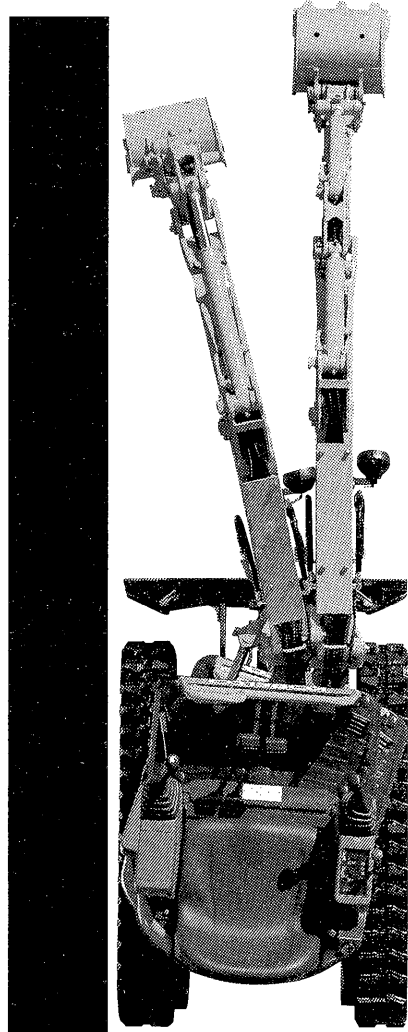
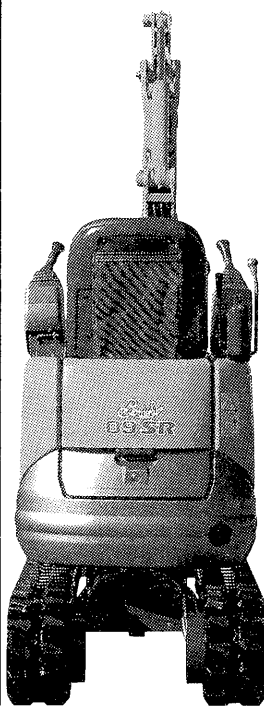
＝ビデオによる研修＝

◆それぞれの見学地に向かう途中、バスの中で「現場分別」について解説したビデオによる研修を行った。一般的な工務店を対象に建設現場における効率的な分別の手順や方法を例示的に解説したものである。

◆とかく我々は「分別」を一つの独立した作業として考えてしまいがちで、したがって一日の作業が終了した後でまとめて分別することを念頭に置いてしまうが、この方法は決して効率的とはいえない。こうしてしまうとその日の作業で出てきたゴミ（廃材）がかなり混ざった状態となってしまい、改めて分別する必要が生じてしまうからだ。※言葉どおり「分別」という余計な作業が増えることになる。

◆ビデオでは、効率化を実現することを推奨している。例えば、建材や住設機器類等を梱包から出したらその場で梱包材を仕分けしてしまうという方法だ。各作業工程の中でゴミをまとめてしまえば、自ずと分別がなされるわけで、面倒な混廃からの仕分けといった作業はなくなり、一日の作業が終了したときには分別も完了しているという理屈だ。要は作業者の認識次第であり、また現場を直接管理できる工務店なればこそ実行も容易であることが理解できる。※当特別委員会ではこのビデオを一定数確保し、会員団体に貸し出しする予定である。

＝最後に＝

◆早朝から一日がかりで行った見学会であったが、帰途の車内で参加者全員に感想を伺ったところ、皆一様に相当な衝撃を受けたようで、産廃適正処理の重要性を改めて再認識したようだ。今回は実施時期の折り合いが悪く、参加者が少数であったが、一人でも多くの方にこうした実態を見てもらうべきだ…との声が高かった。正に「百聞は一見に如かず」の見学会であった。最後になったが、今回の見学会実施にあたり、特段のご尽力をいただいた鈴木由城特別委員会委員長、松村良一同常任委員並びに埼玉県住宅産業協会に御礼申し上げたい。（事務局記）

◀今回の参加メンバーの方々

地場工務店の災害防止活動における問題点
――その対応策としての具体的な提案事例――

本稿は、昨年10月５日に東京・銀座「ヤマハホール」にて開催された〔建築災害防止協会全国大会の低層住宅分科会〕で、本会の鈴木由城・労働安全小委員会委員長が、本会の労働安全の取組みについて発表したものです。

全建連では平成８年度より本部機構に「労働安全小委員会」を設置し、全建連傘下73,000社の地域ビルダー及び工務店の労働災害防止活動の「センター機能の向上」を図りながら、統一した運動の推移とその『質』の向上を図ることに努めてきました。

しかし、全国の各県連に於いては、労働災害防止に取り組む姿勢や認識に格差・温度差が見られ、その運動推進の状況にあっても、各県の建災防支部と連携して先行足場工法の積極的な導入を図るなど非常に先進的な取り組みを実施している県連と、そうでない？県連との間に格差があり運動の質に跛行性が見られ、平均化した活動を実現することが出来ないという現状にあります。

この原因については、各県連の団体としての力量の格差もさることながら、今般の長引く景気の低迷と、それに伴う住宅産業全般の沈滞化も影響を及ぼしていると思われます。

全建連を構成する大半の会員企業は、小規模建築業者であり、住宅の立て替え需要を基本とした個別受注生産が主流であるため、その受注を確保するためにはどうしても防災コストを圧縮せざるを得ないという業界としての特性を持っています。

昨年、全建連が実施したアンケート調査においても「特別加入者」たる事業主本人の被災事故が著しく増加していますが、これはコスト競争を勝ち抜くために事業主本人自らも現場作業に従事する比率が増加し、そのために被災率が増加しているものと思われます。

確かに昨年度は着工戸数の減少に伴い、労災事故の発生件数は大巾に減少していますが、墜・転落等を始めとする「重大事故」の発生は決して減少していないのも事実です。反対に事業主本人の被災件数は増加傾向にあり、また、その多くは事業主本人の「不慣れ」による電動工具の機械事故の発生が多く、この点は昨年度の大きな特徴であると言えます。

こうした状況のもと、全建連「労働安全小委員会」では、最も問題性ありとの指摘を受けている、地場工務店の労災活動の課題を⑴基本的な問題点の整理を行なうことにより、その原因の究明を図り、具体的な改善策を策定すること⑵事故防止の即時的な効果を発揮し、かつ、現状下で最も可及的速やかに実行しうる具体的な安全対策を検討することの２点にその目標を設定し、活動してきたところであります。

工務店の防災活動における問題点の整理

⑴まず「工務店の防災活動における問題点の整理」についてですが、全建連にあっては①事業主の経験主義による防災意識の欠落と責任感の欠如が問題とされ、意識の改革が必要とされてます。次ぎに②防災コストの負担に関する基本的な改善が必要とされ「費用対効果」の実例の提示と開示が指摘され、また③従業員とりわけ現場従事者の防災意識の不足と現場経験主義的判断のミスからくる被災防止のための実例の開示の必要性が指摘されました。

これらの改善対策として①現場における「工程別作業防災マニュアル」の作成②新人教育の地域別集合方式による実施③木建作業主任者講習の実施④職長及び事業主の意識高揚を図るための研修等を計画・実施することと致しました。

また、防災コストの充実を図るために積算上必ず「安全対策費」を算入することができる全建連共通の「積算マニュアル」を作成するほかに「野地」作業の安全性向上を図るための「安全ネット」保有を集団購入等でコストの低減化を図る方法で小規模建築業者への保有促進を進める一方、「先行足場」絡みでレンタル業界へのネットレンタル等種々の方策を検討することとしています。

更に㈳住宅生産団体連合会との連携を一層強め、防災活動の『質』の向上と「在り方」についての検討を深め、全体としての安全対策のレベルアップを図る所存であります。

⑵次ぎに「現状下での可及的速やかに実行できる防災対策の検討とその具体例の実施」については、本年度は次ぎの２つの方法を安全対策として全建連会員に提案し、実施に向けた取り組みを行なうこととしております。

①一つは、従前から地場工務店の一部で行われていた「仮床工法」をワン・ステップ発展させ「新仮床工法」として具体化し提案する。

具体的にはスライドにて示しますが、特徴としましては、棟上げ直後より２階床部分の全面にタル木を置き、その上にコンパネを敷き詰めることで小屋組み・２階部分からの１階部分の内側への墜落を防止し、万が一墜落した場合でも身体に与える影響を最小限に食い止めようとするものです。これは、全建連が行なった調査の結果、２階部分から１階内側への墜・転落事故が多かったことに対処する方策として検討したものであります。

②もう一つの方法は、全建連会員による実用新案である「ワークネット」の普及を図り、その安全促進を図ろうというものです。

この特徴は、足場作業床と外壁面のすき間の30センチからの墜・転落の防止を図ろうとするもので、足場先行工法に適合するというメリットを有しています。

両対策とも現場工務店とりわけ小規模建築業者の実態と特異性に鑑み、その現況に適合性を持ち合わせており、その特徴は①取り扱いが簡便であり②コストが比較的安く③再利用が可能であり④現状の作業形態を変更せずに⑤現場の作業者にも容易に理解することができる――というものです。

その普及には、時間がかからずに確実に浸透し、防災効果をも期待できるものと確信している処です。

それでは、具体的な施工事例として東京の現場において実施した「新仮床工法」のをスライドにより説明いたします。

〈スライド映写〉

①まず、先行足場を設置した処です。〈写真１参照〉

②軒天の下に墜落防止ネットを設置した処です。〈写真２参照〉

③同じく、墜落防止ネットを設置した所を別方向から見た処。

④２階部分の仮床に使用する12ミリのコンパネを上げた処。

⑤２階部分に仮床を施工している処。（たるき材〈40×45〉の上にコンパネを敷きつめた処。〈写真３参照〉

⑥仮床の施設が終了し、仮止めであることを示す黄色の養生テープを貼った処。〈写真４参照〉

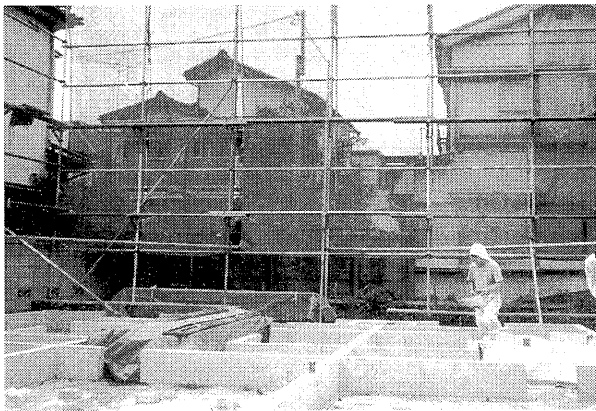
⑦仮床の施設状況を下から見た処。〈写真５参照〉

⑧全建連の会員が開発した足場作業床と外壁とのすき間30センチからの墜落防止用「ワークネット」の全形です。〈写真６参照〉

（５面へ）

（4面からつづく）

直径6㎜のロープ12本を使用、巾33㎝長さ15mで❶ロープの強度が高く安全性に優れ❷資材の垂直運搬が容易で作業性が良く❸設置作業が簡単である❹耐久性の高い材質のため経済性があり、繰り返し使用することが出来るほか、長さの調節が自由であるのが特徴。
⑨ワークネットの先端・結束部分です。（ターンバック金具によって止めることにより足場先行工法に適合するもの。〈写真6参照〉
⑩ワークネットの2階部分における使用事例（外壁面と足場作業床を結束）
⑪ワークネットの角の交差部分の使用事例（相互で補強しあっている）
〈写真7参照〉
⑫現場における2層での使用事例
⑬それを下から見た処。
⑭施工現場における墜・転落防止対策の全体の使用事例（全景を示す）
⑮現場の全体像

全建連では、今後速やかにこの提案した安全対策の全国的な普及に向けて、❶「新仮床工法」及び「ワークネット」を活用する普及マニュアルを作成し❷その浸透を図るために全国会員団体に安全対策推進役員のネットワークを作り上げ❸その推進役員を核とした学習会を開催し、現場での実践を喚起して現場工務店の施工現場における墜・転落事故等の重大災害の一掃を図ってゆきたいと考えています。

〈写真1〉

〈写真3〉

〈写真5〉

〈写真2〉

〈写真4〉

〈写真6〉

〈写真7〉

ご案内

低層住宅施工現場の『安全心がけ手帳』
——マンガと標語でわかる毎日の作業心得——

災害の危険は、住宅施工現場のいたるところに潜んでおり、ちょっとした油断が大きなケガにつながる。ケガをして泣くのは自分自身、そして家族。現場の第一線で活躍されるみなさんにとって、最も大切なのが「安全」。

本書では、安全作業のポイントを四コママンガと標語でわかりやすく解説。標語の唱和、今日の安全プランの記入により、実践的に安全意識の向上を図ることができる。

＜目次＞
1．安全心がけカレンダー
　1日危険予知（YK）をやったのに
　2日監督の指示通りやっておけば…　ほか
2．作業者のマナーと心がまえ
　近隣への心くばり
　作業中の身だしなみ　ほか
3．用具の正しい使い方
　脚立／梯子／携帯丸ノコ　ほか
4．ケガをしやすい箇所と名称
5．ケガを未然に防ぐ心と体のストレッチ

＜申し込み先＞
PHP研究所普及二部　越智（おち）
TEL：03－3239－6258
FAX：03－3222－0424

＜体裁・価格＞
新書版　112ページ
PHP研究所編
特別価格850円（税別）
＊定価945円（税込）

2000 東京国際木工機械展 4月27日から開催

グッドリビングショー2000は23回目を迎える我が国最大の、建築、建材関連の展示会である。99年春の第22回展では12万人の来場者を集めた。

今回の東京国際木工機械展はグッドリビングショーと会期を合わせて、行なわれるので、今回はその相乗効果でより多くの来場者を期待している。

イベントも同組合が一年間に亘って実施してきた「未来の木工機械」、「未来の住宅」、木工作品のコンクール入賞作品発表展示もある。ご来場者の投票で選ぶ「出品物人気コンテスト」もあり、投票者には抽選で豪華賞品も多数用意される。

140団体、650小間の規模で開催される。

全建連も協賛。

◆◆

会員企業動向

ＩＳＯ9001を取得、４つのナンバーワンを戦略化

岡田建設（北海道・帯広）

岡田建設（本社：北海道帯広、岡田肇社長・北建連理事長・本会副会長）は、２月８日、十勝管内の住宅部門では、第１号となるＩＳＯ9001の認証を取得した。認証範囲は本社全部門で、総務、営業、建築（住宅、マンション部門含む）、土木の各部門。審査登録機関は英・ユーカス認定のサーティフィケーション・インターナショナル・ジャパン。昨年４月２日から本格的に取組みを開始し、12月24日本審査を受けた。ＩＳＯ9000シリーズの取得は建設業界では浸透し始めているが、住宅業界はこれから、という段階、今年４月から住宅品質確保促進法が施行されたこともあり、品質管理に向けた業界全体の動きをリードする役割が期待される。

また、同社は、いずれも十勝管内初の「免震建築設計施工」、「両断熱工法」、「低価格のＲＣ住宅」を、ＩＳＯ9001の承認とあわせて〔４つのナンバーワン〕と称して21世紀へ向けた自社の戦略として推進していく、としている。

免震建築は、東京都内で２月末完成した高層マンションの設計施工（ＪＶ）を手掛けた。ＪＶの他社は道外中小企業で、独自の技術研究を行った。今後、一般住宅にも免震構造が普及する、とみて技術応用の研究を進める。

両断熱工法は、型枠と壁下地材を兼ねる断熱ユニットをブロックのように積み上げ、間に鉄筋を組んで流し込む。断熱ユニットは発泡樹脂製で施工に特別の技能や下地材が不要。また、型枠配材も発生せずローコスト、高断熱の環境配慮型。帯広市内のマンションに採用。

ＲＣ造の住宅は、型枠材がプラスチック系の材質のため軽量で女性も組立て可能。転用もできることから通常の建築費の１～２割を占める仮設費でコストダウンを図ったもの。坪52万３千円（照明や付帯設備工事含む）を実現した。

◆　◆

～いよいよ第10回～
工務店の家コンテスト
10回を記念し「団体特別表彰」・金一封も！
〔金のかなづち大賞〕

このコンテストは全建連とニューハウス出版の共催により毎年実施しているもので、今回は記念すべき10回目となります。本会加盟工務店であればコンテスト参加は自由です。参加のためには築2年以内（平成10年4月以降竣工）の住宅の外観写真と平面図を用意していただくだけです。選考はニューハウス出版編集部に於いて行います。選考メンバーは月刊「ニューハウス」の読者代表3名と編集長の計4名です。この選考で20点の候補作を選び出し、「ニューハウス」誌上にカラー掲載されます。掲載の20候補作品に読者が投票、最も得票数が多かった作品に“金のかなづち大賞”が与えられるというものです。建築家など専門家による選考ではなく、あくまでも「ニューハウス」の読者投票によって各賞が選ばれるところにこのコンテストの意義があります。

●昨年第9回は（株）カイトフローラ（富山県）が「金のかなづち大賞」を受賞。今年第10回は全国どこの工務店が射止めるか。

応募要領

①住宅の全景写真（築2年以内。平成10年4月以降竣工の住宅。和風・洋風・和洋折衷いずれも可）。カラーでサービス版以上。
②平面図（青ヤキ又はコピー）。
③応募の〆切りは本年4月28日。全建連事務局又は所属組合に送付下さい。
※応募作品は返却しませんので予めご承知おき下さい。

応募工務店のメリット

①創刊67年の伝統ある住宅専門雑誌「ニューハウス」（全国発売8万部発行）に候補作品（20点）・入賞作品すべてがカラーで無料掲載されます。
②入賞の工務店の紹介記事が「ニューハウス」誌上に掲載されます（4色ページ、1工務店平均1/2段・無料）。
③本年10月4日開催の第15回全建連大会（札幌）で入賞工務店の紹介、表彰を行います。
④第10回を記念し今回はこれまでで最多の受賞工務店を出した会員団体を「団体特別表彰」します。
⑤第10回を記念し今回は「金のかなづち大賞」受賞工務店に金一封も授与します。

表彰種別

賞の種類	件数	内容	表彰等※
金のかなづち大賞	1件	読者投票最多作品	★☆◎ 今回のみ金一封も
和風・優秀賞	2件	和風タイプの得票順	★◇◆
洋風・優秀賞	2件	洋風タイプの得票順	★◇◆
和洋折衷優秀賞	2件	和洋折衷タイプの得票順	★◇◆
狭小敷地・特別賞	1件	敷地100m²以下に建てた住宅で最も優秀な作品	★◇◆
間取り部門・特別賞	1件	外観だけでなく特に間取りに工夫が見られる作品	★◇◆
団体特別表彰	1件	10回までで最多の受賞工務店を出した会員団体	★◇◆

※（★）＝表彰状　（☆）＝特製トロフィー　（◇）＝盾　（◎）＝詳細誌上紹介　（◆）＝誌上紹介

全体スケジュール

平成12年	
4月28日	＊応募作品締切
5月1日	＊選考委員会、第一次選考（50点選出）
5月12日	＊選考委員会、第二次選考（20点選出）
7月8日	＊「金のかなづち大賞」候補作品誌上発表　月刊「ニューハウス8月号」にて。読者投票開始
8月	＊読者投票集計　＊受賞作品の撮影取材
10月	＊「金のかなづち大賞」他優秀賞誌上発表、「ニューハウス」誌11月号（10月8日発売） ＊第15回・全建連札幌大会において「第10回・金のかなづち大賞」表彰式

暖炉のある家

インテリア・コーディネーター　野口　潤子

やっと引越しの日が来た。

去年の8月に始まった改装工事は、年内に完了のはずが20日延び、さらに10日延ばして1月中に終わらすことができたのだった。猛暑から秋、冬と5ヶ月かけたことになる。

親子はスープの冷めない距離に住むのが理想というが、それを実践した形になった。両親は隣に家を建て、空いた家を長女の家族の住まいとして改装したのだった。

木屑や埃が舞う土足のままの部屋が日いちにちと姿を変え、最新設備を備えた家へと変貌する。床暖房、結露を抑える真空ガラス、天井付けエアコンなど、小さな子供たちの部屋も同じ快適さが整えられ、キッチンにはイタリアの厨房をイメージさせるシステムキッチンが付いた。

若いファミリーに贅沢すぎるのではと思えたが、親と子の二軒の工事に関わったことで、少しづつ伝わってくるものがあった。

「家」に対する施主のポリシーである。

新築したばかりの家に、突然呼ばれていったときの事を思い出す。

床材だけでなく、階段、廊下もすべて桜のムク材、壁は漆喰塗りといった造りには驚かされたが幾何学模様に小石をデザインした庭、婦人の趣味のスペースのサンルームなどさり気なくこだわりを配している。

テラコッタを敷き詰めた明るいリビングは、一枚板の大きなテーブルにYチェアーが並び、南欧の別荘を思わせる。バーカウンターの壁には、外国で見付けたという時計が、オーダーかと思うほど合っていた。

砂漠の風をイメージさせる抽象画の板切れに、長針と短針だけがついている。

「主人は気に入れば安物でも気にしないの。好きなものに値段は関係ないと言ってね」

重くてがっちりしたアイアン製のガーデンチェア、シェードの大きな陶器のスタンドなど、大振りでがっちりしたものが目についた。

西部開拓時代の父親像が頭に浮かんだ。大黒柱となって家族を守った、強く逞しい父親。

娘さんの選んだカーテンやロールスクリーンは、シンプルで気取りがなく、壁紙はプレーンな白だった。

家とは何か、大切なことは何かを、空気を吸うように受け継いできたのだろう。一様に贅をこらすのではなく、家の造りは重厚に、装飾はあくまでもナチュラルであれ、ということを。

広いリビングの一角にある暖炉はそのままの形で残された。薪が赤々と燃えている、火を囲む団欒のひととき。想像しただけでも心が温かくなる。

家とは何か、育むものの大切さを教えられた気がする。

全建連月報
（3月1日～3月31日）

- ▶ 1日　岐阜ちきゅう住宅講習会
- ▶ 1日　優良田園住宅WG
- ▶ 3日　技能グランプリ開会式
- ▶ 7日　リフォーム第6部会
- ▶ 8日　富山ちきゅう住宅講習会
- ▶ 8日　構造改善事業事前協議
- ▶ 9日　住団連運営委員会
- ▶ 9日　住宅性能向上委WG1
- ▶13日　指定教習機関会議　東京
- ▶16日　建設省　業務検査
- ▶16日　住宅性能向上委WG1
- ▶17日　性能表示制度検討会
- ▶17日　合板検査会評議会
- ▶21日　木建主任者トレーナー講習
- ▶22日　製造物責任検討委員会
- ▶23日　構造改善計画承認検討会
- ▶23日　中小住宅流通合理化委員会
- ▶24日　大建産40周年・総会
- ▶24日　住団連　住情報WG
- ▶24日　産廃施設見学会（記事別掲）
- ▶25日　品確法説明会中原建設組合
- ▶27日　省エネ機構評議会・理事会
- ▶28日　秋田三役会と協議
- ▶28日　住宅性能保証制度説明会
- ▶29日　住木センター理事会
- ▶31日　新世代木造住宅認定委員会

◆　◆